

聖書箇所：ルカの福音書3章1～14節

説教題：私たちはどうすればよいのでしょうか

1 救い主を待ち望む

今日からしばらくルカの福音書を見て参ります。

この3章では洗礼者ヨハネが登場してきます。今から二千年ほど前のことです。当時イスラエルは、一応形としては一つの国とはなっておりましたが、イスラエル国家とは名ばかりで、実際にはローマ総督ピラトの許可がなければ何もできません。イスラエルはユダヤ人の国でありながら、ローマ帝国に支配されているのです。イスラエルはアブラハムを通して神から与えられた約束の地であるとの信仰がありました。ところが現実には、自分の国に住んでいながら外国人の支配にある。

当然、人々の心中には不平と不満が渦巻いていきます。神の民たちがこんな屈辱的な扱いをいつまでも受けるはずはない。神は必ず自分たちを救ってくださるに違いない。聖書にもそう書いてあるではないか。目の前の生活で不満が高まれば高まるほど、救い主がスーパーマンのようにして来てくださり、この政治的な困難から救ってくださるに違いないとの思いが湧いていきました。それが二千年前のイスラエルの様子です。

2 荒野で叫ぶヨハネ

そんなとき、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下ります。ヨハネはすぐにヨルダン川のほとりのすべての地方に行って、罪が赦されるための悔い改めのバプテスマ

を説きました。それを聞いた群衆は、次から次へと列をなしてヨハネのところに来ます。どうして、人々はヨハネの所に押し寄せたのか。

マラキを最後にしてイスラエルにはおよそ四百年の間預言者が現れませんでした。神は、イスラエルが大きな困難にあつて苦しむとき、常に預言者を送ってください、慰めと励ましのことばを語ってくださいました。先ほど申したように今、自分たちの国がまさに大きな困難に直面している。神はいつ預言者を遣わしてくださるのか。そんな預言者を待ち望む雰囲気がありました。それがいまや、ヨハネはがらくだの毛の着物を着て、腰には川の帯を締め預言者の格好をし、神の言葉を語っている。今や神は自分たちを顧みてくださり、預言者を送ってくださいました。人々がヨハネの所にわざわざ足を運んだのには、そんな事情がありました。

3 悔い改めのバプテスマ

(1) まむしのすえたち

ヨハネは集まってきた人々に対して、こう語ります。「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りから逃れるように教えたのか。それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起すことがおできになるのです。」

わざわざ遠くからヨハネの話を聞くためにやって来たのですから、少しくらい優しい言葉を語っても良さそうです。ところが「まむしのすえたち」と厳しい。なぜそんなことを言うのか。そこにも理由がありました。彼らはヨハネの手でバプテスマを受けたいと希望し自らやって来ました。そこだけ見ると、この人たちは非常に信仰心に篤い熱心な人たちであるかのように思ってしまう。ところが、そんな単純は話しではない。ヨハネは、なぜ人々が自分の所にやってきたのか、その動機を見逃しません。

人々は心の中で思っていました。「自分たちはアブラハムの子孫なのだ。神の救いの契約はアブラハムを通して与えられたではないか。神はその時アブラハムの子孫を祝福すると約束してくださった。聖書に語られているいろいろな律法もきちんと守ってきた。その律法である民数記19章12節にはこう書いてある。「汚れた者は、水で罪のみをきよめ、きよくならなければならない。」自分たちは、このみことばに従うためにヨハネの所に来た。」

(2) 神の御怒り

どこにも問題がないように見えます。けれどもヨハネの目にはそうは見えない。大きな問題がありました。ひとこと言えば、聖書に書かれているとおりのことをきちんと守ってさえいたら、自分たちは救われる。何せ自分たちはアブラハムの子孫なのだから。そんな信仰です。

だからヨハネは言いうのです。「よく言っておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を怒ることがおできにあるのです。」神は石ころさえもアブラハムの子

孫とすることができる。あなたがたは自分のことを何か特別選ばれた者と思っているけれど、石ころを手にとって自慢するのと同じ。いつまでもそんな中身のない信仰にしがみついていたら、結局みな切り倒されて、火に投げ込まれることになる。そのように警告しました。

(3) 良い実を結ばない木は

私たちは9節のさばきのみことばを読むとき、心が穏やかなままというわけにはいきません。「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」

もしかして、自分もその木の一本なのだろうか。自分も「おまえは良い実を結ばない悪い木だ」と言われて、切り倒され、火に投げ込まれる運命なのだろうか。心配になります。というのは、自分のことをふり返ると、どう考えても良い実を結んだとは思われないからです。むしろ、悪い実をいっぱい結んでしまっていたのではないか。そうとしか思えない。そんな私は、いったいどうしたら良い実を結べるのか。そして、切り倒されずに済むのか、そんなことを考えてしまいます。

4 私たちはどうすればよいのでしょうか

ヨハネから思いがけなく厳しいことばを聞かされた人たち。どう反応したのでしょうか。ある人たちは、ヨハネのことばを聞き、怒り出しました。なんだ、せっかくおまえの所の来てやったのに「まむしのすえたち」とおまえに言われる筋合いはない。何と失礼なこというやつだと言って、引き返した人たちもいたでしょう。

しかし一方、そうでない人たちもいました。

それぞれ、群衆、取税人、兵士たちが、ヨハネに同じ質問したと書かれています。「私たちはどうすればよいのでしょうか。」

おそらくみなさんだって同じ質問をしたくなるでしょう。そんな厳しい神さばきがあるとしたら、いったい私たちはどのようにしたら救われるのか。神のさばきから逃れることができるのか。火に投げ込まれずに済むのか。

ヨハネは、群衆に対してまずこう答えました。「下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」取税人たちにはこう答えました。「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」兵士たちにはこうです。「だれからも力づくで金をゆすったり、無実なものを責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい。」

質問してきた相手の状態に合わせて、具体的にこうしなさいと勧めています。最初に質問してきた群衆たち、貧しい人たちではなかったようです。生活レベルから言えば、下着が二枚以上あることなど当たり前という生活をしてきた人たちです。食べ物だって有り余っている。

取税人とは、ローマ帝国の命令を受けて、税金を取り立てる職業に就いている人たちです。しかしそこには不正が横行していて、たとえば1000円取り立てるべき所を、1200円に水増しして徴収し、200円分を自分の懐に入れていました。彼らはそうやって私腹を肥やし、財産を築いていきました。

兵士たちは、武器と力にものを言わせて、ここに書かれているようなことを当たり前のようにやっていました。

それぞれに対してヨハネは違うことを

言っていますが、でもよく見るとみんなおなじ事を言っている。共通点があります。ひとこと言えば、「今持っているもので満足しなさい。置かれている環境を感謝して受け入れなさい。」

クリスチャンであれば、こんなことは耳にたこができるくらい聞かされていて、頭ではよくわかっています。具体的に言えば、夫がもらってくる給料の金額がたとえ少なく感じても、心から感謝し、それで満足しなければと、教会にいる間はそう思っています。でも家に帰れば、やっぱり毎月の生活費のことが悩みです。感謝のことばより、不平不満のことばがどうしても先に出てしまう。

ヨハネに言わせれば、良い実を結ばない木です。切り倒されて火に投げ込まれる木です。わかっているけれど、できないから困っている。それが私たちの本音です。

5 主がこのようにしてくださる

ヨハネは私たちをさばくためにこんな事を言っているのでしょうか。そんなはずはありません。救い主の歩む道を整えるためにこそ、彼は神によって遣わされてきたのです。ならば、ヨハネのことばは、必ず主イエス・キリストの恵みを指し示していることとなります。

どういうことか。私たちはしばしば順番を間違っただけで受け取ってしまいます。ヨハネが言っているとおりのことを守れば、私たちは救われる。これは間違った順番です。

正しい順番はこうです。イエス・キリストの救いをいただいた者は、いつか必ず与えられたもので満足し、余っているものがあれば喜んで持たない人たちのために分け与えられるようになる。努力もいらない。気がつけ

ばそうになっている。ごく自然にそうなる。

私は救われたはずなのに、そんな悟りの境地には達していないと、嘆く方もいるでしょう。安心してください。神はゆっくりと時間をかけて、実に気長に私たちとおつきあいくださる方です。今はそうでなくても、やがてのときにこうしてくださる。私たちは、楽しみにその時のこと待っていればよい。なにもあわてる必要はありません。

そんな甘いことを言っていたらだめですと、おしかりになる方もいるでしょう。でもどうですか。がんばったらできるのですか。少しはできるかもしれない。でもいつまでも続くわけではない。できないときがあります。そんなとき、がんばってきた人ほどひどく落ち込むはず。できない自分を責めるはず。神はできない私たちを責めるためにおいでになったのではない。できない私たちを救うために来られたのです。もし私たちが、自分の努力によってこのヨハネが言うとおりのことができるのなら、主イエスは私たちに必要ありません。私たちがどんなにがんばってもできないからこそ、主が来てくださらなければならない。

クリスチャンだから自分は精一杯神にささげなければならない。そんなプレッシャーを自分に課して歩んでこなかったでしょうか。そうやって疲れてしまっただけではなかったでしょうか。

そうではなくて、クリスチャンだからこそ、「自分はできない者です」と弱さを告白することができます。弱さのうちに主が助けを与えてくださいます。その恵みを今週も味わっていきたいと願います。